創立40周年記念座談会

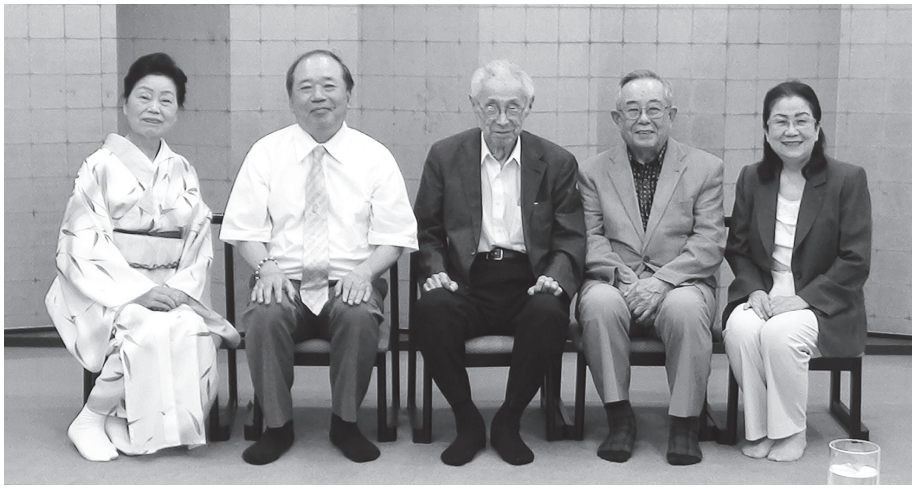
＜出席者＞

顧　問	星野　　命	（元会長）	理　事	杉本　末子	（第３期）
会　長	山内ミハル（司会者）	（第３期）	監　事	福岡　恒忠	（第４期）
元理事	村田　　進	（第１期）			

＜　時　＞　2015年６月30日（火）、10時から12時

＜場　所＞　金沢ニューグランドホテル

過日、「公益社団法人　金沢こころの電話　創立40周年」を記念して、座談会を行いました。記念テーマに、「つながるこころ　つなげる明日」を掲げています。40年前にスタートした電話相談活動が、「何をつなげよう」としてはじまり「明日へのつながりのために、何がさらに求められているのか」、５氏に、創立当初の初心に返り、現在の金沢こころの電話の進むべき指針について、忌憚なく語って頂きました。



１．高校相談室担当の先生とカウンセリング専門家の連携

山内　今日は、もう一度初心に返り、立ち上げの頃、立ち上げて下さった方々のご意志はどうだったんだろう、それが今も脈々と受け継がれているか、も反省しつつ、ざっくばらんにお話し下さい。立ち上げの頃、まず１期生の村田さんからお願いします。

村田　当時私は、20代、“みどりなす”うら若き高校の教師で、特に相談室に関わっていた高校の先生、その中に、創立メンバーの花山先生（元副会長、宗林寺住職、石川県立盲学校校長）、旧姓北島先生（現　関先生）、西谷先生（元会長）の方々がおられ、生徒の悩みへの対応について勉強されていた。特に、僕の赴任高校の生徒に、当時金沢大学教養部教授多田治夫先生による「高校生のためのエンカウンターグループ」が指導され、僕は、同じ英語科の北島先生に引っ張られるかたちで、

そのファシリテーターとして参加していた。その多田先生は、金大で、金大生のためのエンカウンターグループをやっていた。

もうひとつは、元高松病院　院長　道下先生に生徒の悩みについてご相談していた。そして偶々、金沢で「中学生の自殺事件：２人で一緒に飛び降り自殺をやったが、１人は亡くなり、もう１人は助かる、」という痛ましい事件が起きた。

確か、道下先生が、「石川県に『金沢こころの電話』を立ち上げようか」といわれ、我々高校の相談室担当の先生方も賛同され、旗揚げになった。

東京いのちの電話、関西いのちの電話がすでに設立されていたが、「こころの電話」という名前と、高校の教師が中心になり、広く人を集めてボランティアという点でゆっくり独自の道を歩み始めた。

そしてその精神は、カール・ロジャーズの筋金入りの考えの元に結集していたので、まあ40年はその精神はつながって今に至っていると思う。その精神のもとにが初心に返るのだと思う。

山内　ありがとうございます。その立ち上げの時に関わった、高校の先生は。

村田　加藤成子先生、１期生高校の先生20数名おられた中で、現在残っているのは、僕と加藤さんだけですね。

山内　1975年10月、道下先生のご講演があって、１期生が講演を受けて、石川でも中高生の自殺者が多発して、すぐに立ち上げようと先生方が考えられ、12月に立ち上げが決定される。その年が金沢こころの電話の創立のとき、実際に電話相談を受けたのは、翌年４月。２期生はその年に非常に急いで養成された。

山内　私も杉本さんも３期生なんですが、最初は、電話機１台で、当番１人で、日曜祝日だけ。だから、１年掛けて180件ほどしか相談受けていない。

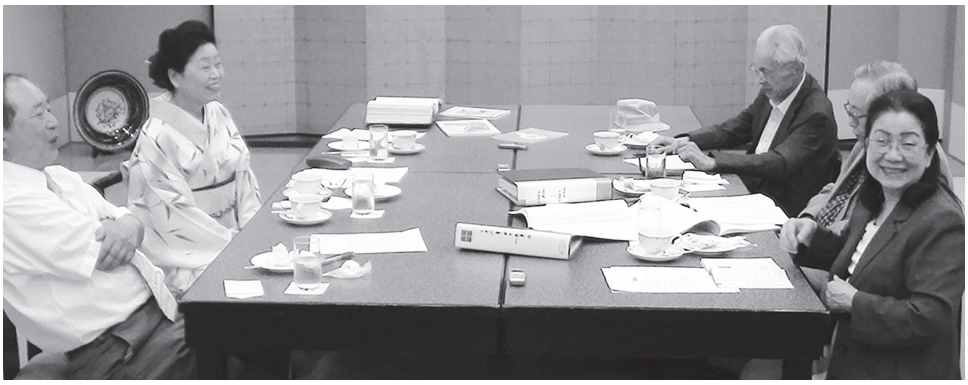
村田　最初は、補導センターのヤングテレフォンを借りていて、開局一番にかかった電話は、北島先生が受け、四国の女子高校生からの電話だった。朝日新聞が「金沢にこういうものが出来たんだ」という記事が出ので。

福岡　その当時の相談統計を見ると、「教育相談」という項目が多い。その点今とは違う。

村田　そうですね。生徒の利用があった。こちらが緊張して出ると、「お父さんの誕生日祝いに何がいい」と、ほっとするカワイイ電話もあり、心が和んだのも覚えている。

山内　１期生の村田さんに続き、３期生の杉本さん、お願いします。

杉本　１・２期生が養成プロジェクトのような格好で私たちを指導してくださった。多田治夫先生が、創立20周年記念のときおっしゃっているように、「自殺防止とか登校拒否とかスクールカウンセラーの方々の悩みを聞く」という主旨が、３期生から伝わってきた。１・２期は高校の先生、３期も高校の先生が中心だが、私ともう一人、２名は看護師だった。多田先生と関先生は、私の看護学校の教師だった。当時私は、「どうしたらガン末期の患者さんの家族とうまくコミュニケーションがとれるのだろう」と、多田先生に相談していた。そしたら、「杉本君、自分を知ることから始めないといけない。それにはこういう勉強会があるから参加してみないか」と誘われ参加した。一番最初に取った電話は「登校拒否の子をもつお母さんから」、２番目の電話は、「ぼく、登校拒否。３か月間学校へ行っ



ていない」という子から。私は、勉強で入ったが、立ち上げと軌道にのるまで、未熟だけど頑張らないといけない、それで悩み、自殺企図とか、「中学生の自殺の事例検討」をしたり、高校生で死にたい、というのもあり、危機介入が後ろから迫ってきてた。わたしは教員じゃないので、今の学童の発達段階、どうしたらこういう気持ちになるのか、金沢大学夏期講座に多田先生の紹介で行った。また、関西いのちの電話の一泊二日の研修に参加した。そのとき、多田先生はスパルタ教育で、私は教員でないものだから、「とにかく、スーパービジョンを受けなさい。エンカウンターをやりなさい」と言って、羽咋の民宿で三泊四日で、村田先生も行かれたように、１期生、２期生、３期生でエンカウンターをやって、「自殺防止対応のシミュレーション研修」をした。これが私の金沢こころの電話の関わりの発端。何か曖昧な気持ちで入ったけれど、何か責任感のようなものが後ろからついてきた。立ち上げの軌道に乗せられた、という思いが昨日のことのように思い出される。３期生は今、会長と私の二人のみ。貴重な３期生として継続しているのが現実だ。

山内　ありがとうございます。今、立ち上げの頃の話を伺っているんですが、もう１期遅れて入っていただいた福岡さん、その頃の思い出を。

福岡　４期から一般公募になる。私自身は、40年前、40代の社会人、電話関係事業の職員だったので、電話による相談に興味を持った。またちょうどその頃、私が所属する教会の春の特別集会で、東京いのちの電話の総主事、斉藤友紀雄氏が講師として来られた。その講演会に、西谷先生、関先生、などその頃金沢こころの電話の中心になっておられた先生方が４，５人参加された。そのとき東京いのちの電話の「自殺防止の電話相談」のことを聞き、「そんな電話相談があるのか」と思ったと同時に「金沢でも始めたんだ」と参加された先生から聞いて非常に関心が強くなった。その翌年、北國新聞に当時の活字は小さく、「電話カウンセラー募集」の小さな記事が載った。その時私の心が動いた。その翌日、これもまた偶然、北國新聞で「駅前近くのビルの屋上から、女子中学生が二人飛び降り自殺を図り、うち一人は死亡」との記事を読み、「金沢でもそういう若い子が自殺する。そのために一生懸命働いている電話相談が金沢にある」と思うとたまらず、翌日すぐに応募した。

僕らが当番に入ったその頃の統計を見ると、高校生からの通話が多く、なぜか男子高校生からの性に関する相談が多数を占めていた。また、当初あった教育問題よりも一般の方からの相談電話がどんどん増えてきた。こころの電話ではメンバーを増やして相談時間帯を

土・日に限らず、ウイークディにも広げていきたいとの願いもあって一般公募にふみきり、われわれ一般人も参加することとなったという背景が当時あったような気がします。

山内　ありがとうございます。それから、どんどん相談曜日も増えて行って、カウンセラーも毎年20名ぐらいづつ順調に養成されていった。

杉本　事務局の場所の関係もあって、私たち、立ち上げ時、本当に苦労したのは、相談場所が何回も変わり、その度に引っ越しの準備で、一週間ほど大変だった。しかもどこに行っても、土、日お借りして、事務局に座って電話を取るのが、非常に肩身の狭い思いをした。

山内　最初は、ヤングテレフォンの場所で電話を借りていた。

村田　その前は、北島先生の自宅だったんですけど、難しいことも多く、補導センターのヤングテレフォンに移り、能楽堂の横に移り、県庁の南分室へと移った。

山内　「ツーツーなこころ」（２２－７５５６）という電話機がやっと出来て、その電話機をもって能楽堂の一室に行ったり、それから南分室へ行き、そして文教会館に移った。

杉本　その文教会館に移ったころに、福岡さんが事務局長として活躍し、相談ブースを３か所、電話機も３台になった。

村田　ちょうど時代の流れに沿って、電話機もダイヤルからプッシュフォンへ変わって行った。今の時代と全然違う。

福岡　金沢こころの電話のポスターも、ダイヤルの絵だったから今とは違っていたね。

村田　その時のことを思い出すと、みんな10円玉をもって電話をかけていて、「10円玉切れますから」って言いながら公衆電話からかけているという、ほのぼのとした時代だった。

福岡　今は携帯で自宅からかけてくる。

杉本　スカイプとかで無料の電話でかけてくる。

福岡　無料だから、時間に問題がないから気軽にかけてくる。

村田　大阪や新潟から、普通に部屋からかけてきている。

山内　今まで１期、２期、３期、４期生のお話を伺いました。その後、ここに座談会とは別に、島田先生と浦田先生との対談内容も加えさせていただきたい。

　そして、星野先生に加わっていただいたのは何年だったでしょうか。先生がICU（国際基督教大学）をお辞めになり、金沢に来られるのを機会に指導していただくようになった。それ以前は、星野先生に講師をお願いしたことを覚えています。

星野　私は、1971年、東京いのちの電話を立ち上げた時の訓練委員だった。金沢へ移ったのは1991年。金沢にも、多田先生、道下先生や、１期生の加藤さんや、高校の先生たちが集まり研究会を始め、金沢こころの電話があることを知った。特に金沢は宗教色がなく、ドイツや東京のいのちの電話とは違うんだなあと気づき、すぐにお手伝いが始まった。そのときは、カウンセリングとか、ヘルスケア、精神健康のケアとか、学問的立場でのお手伝いをしていた。そのうち「電話相談そのもののボランティアの仕事の重要性」に気づき、難しいことは言わないようにしてきた。

山内　先生は、はじめ講師の立場でご指導いただいたんですが、その後、会長、相談役、顧問とお願いしてきました。

星野　顧問の方が発言が有効じゃないかと思いまして、お手伝いしている。私が金沢へ来る

ことになって、金沢の電話相談でも手伝って、と期待されてるんじゃないかなんて…。

山内　期待してました。星野先生が金沢こころの電話にかかわっていただけるというので、みんな喜んだのを覚えています。

星野　東京いのちの電話から多摩いのちの電話が新しく追加され、同じ中央線でつながっていたので、両方の支援にかかわった。金大の多田治夫先生と田中富士夫先生とは、ずーっと親しくしていたので、多田先生から「金沢にも電話相談あるよ」って話があって、お手伝いしましょうとなった。

村田　一番初め、いのちの電話の稲村博先生（筑波大学）のところへ、関先生が直接電話をして金沢にお呼びし、何度か研修会が開かれ、私も参加した。それは、斉藤友紀雄総主事の講演の前でした。

星野　あの頃は、精神科の医者とか、事務局長を長く担ってこられた斉藤友紀雄さんとか、我々は専門と思っていた。どちらかというと電話相談の技術面を助けていただいた。今、私たちが考えているようなもっと幅広い、複雑というか、そういうものが必ずしも対象ではなかった。

２．立ち上げから40年の歩みはどうだったか

山内　立ち上げの話から、今度は、その後40年経って、金沢こころの電話もいい意味で発展してきた。大きくなり相談件数も8,000件前後に上っている。じゃその40年の歩みはどうだったのか、会として思い出されること、反省すべき点、感じられるところをお願いします。村田先生どうでしょうか。

村田　40年の間、初めの10年位、ニュースレターの前身「クォータリー」を編集し、手作りでガリ版切って発行していた。部数も少なかったので。統計のこと、研修のこと、養成セミナーのこと、一人が何役も担ってやっていた。特に養成セミナーは長かった。その後、平成元年から10年位はノータッチでブランクがあり、外部の心理の方の武者修行をしていた。その間、関先生とか、浦田先生とか、徳田先生が頑張っておられた。私が理事、副会長として復帰した時は、関先生や浦田先生はおられず、ちょうどバトンタッチした形となった。もう全く会の雰囲気も違っていた。浦田先生が書いておられるように、困難な電話、なんていうか人を困らせる電話、常連とか、頻回通話者からの精神的な悩み、だから専門的な対応が必要となっている。会員もそのニーズに合うような病院関係、看護師さんなど、教育だけでなく福祉、医療分野の方々も加わり、金沢こころの電話は成熟している。

星野　養成セミナーも土・日研修から火・木週２回と、一般応募者を考えて、日取りに苦労された。

山内　星野先生が加わっていただいた頃は、週２回と大分システムが充実していた。

星野　記録に変遷の様子が載っているかどうか。

村田　「35周年記念誌」に「養成研修プログラムの変遷」が資料として詳しく載っている。

山内　40年間の各部会活動の変遷もこの記念誌には収録する。

近年、養成セミナーの受講者が減ってきている。昨年は８名受講され、今年認定者６名。今年から養成プログラムは週２回から週１回とし、年度内に全日程を長期掛けて終わるよう工夫し直されている。

杉本　会として、良かったところは、会全体が組織化されシステム化されて、プログラムもきちっとなり、社会のニーズに適応した講師の選択がされた。ただ反省するところは、研修の“振り返り”がされていない。今、部会活動が活発になり、部会間の連携が未熟、軌道修正していくべき。例えば、頻回通話者は、相談部会で統計処理する。「どういう頻回通話者か」データに基づき研修部会で研修され、会員部会の会員の心のケアに反映されたり、それを受けて世話人会では、セックステレフォンとか介護とかに対応するのが難しいと感じている人をサポートしていく。「カウンセラー自身をサポートする」組織体制が今後絶対必要だ。

もう一つの反省点は、浦田先生がおっしゃっている最初の理念「ボランティアだからこそ責任がある」のに、ボランティアという甘い考えでは継続につながらない。公益法人となり、「必ず会員はどこかの部会に所属し、部会活動を能動的にしなければならない」と定款にうたわれている。体調とか、家庭環境で休務する場合も、休務届を提出し、それ以外は部会活動を積極的に行うことが希薄になってる。「真のボランティアとは何か」ということを、研修、養成部会、世話人会で、もちろん会員部会のケアにも取り入れたい。

３．「発達障害、生活障害」など、社会の機微にあった研修や、対応を！！

星野　最近、電話相談に限らず、「中高生、子どもに特化した研究会」や、課題として盛んにやってる。思春期、小学生であっても親との関係とか、その辺の研究、勉強会を特化する必要がある。

村田　たとえば「性の問題」、セックステレフォン、性でひっくるめてしまえばそれまでだが、「思春期の性」また違う。非常にデリケートなので、こころの問題がからんでいる。こころの問題として、若い人の性の問題は、一旦受け止めていく姿勢が必要だ。

杉本　発達障害の人の電話を何回かとった。星野先生がおっしゃったように、基礎的な学習をある程度してないと、ただきけばいいでなく、なかなか電話の対応も難しい。いま、頻回通話者、精神障害者の対応プロジェクトを立ち上げ、やろうとしているが、発達障害のお子さんが成長し、思春期になったり、成人になっても発達障害は消えないので、適切なフォローや、紹介が必要だ、最近、そういう基本的な研修を受けてきて、そう思う。

星野　最近、大人の発達障害が問題になっている。

村田　かなり後年になって、「自分は発達障害だ」とわかった人も多い。

杉本　曜日研修で、臨床心理士の北本先生が「そのお子さんが成長し結婚して、今、熟年離婚問題になっていませんか。そういうこともあるという事を皆さんお考えになって、受話器をお取りになっていますか」といわれ、ドキッ

とした。そういう勉強しなくっちゃという思いでした。社会ニーズに合った研修を絡み合わせて行かないといけない。

福岡　僕は、個人的に言うなら、自覚していない。何回か聞いたけど、時には子供の話と思ったり、電話相談をよくかけてこられる中には、たしかに同じようなこと繰り返す何か理由があったんだろう、と思ってもその人を障害というような理解で把握しているかというと、していない。

星野　それとね、もう一つは程度。この頃使うようになったのは、１度から５度まで。つまり内容だけでなく、そのひどさっていうか、相談員の立場から見て、これはどうも３度とか５度になったら、それこそ専門家を必要とするわけだ。

杉本　北本先生のおっしゃるには、精神障害って言っているけど、専門のところへ行っていないため、精神障害とされているケースがあるとのこと。発達障害の人は、知能指数は低くなく、特権というか、優れたところをもっている。その優れたところを引き出す聴き方とか、曜日研修の事例検討会が一番勉強になると思う。

村田　今、学校現場は、発達障害のことで一杯だ。クラスの中にいるって言って、先生方非常に苦労している。やはり、発達障害の中核症状「相手の気持ちがわからない」とかをおさえることだ。

山内　ぜひ研修を早めに、しかも具体的にやりましょう。

　他に、金沢こころの電話の会員活動に対するアドバイスを、星野先生の立場からお願いします。

星野　前からの経験者の話も大事だけど、現在、我々が直面している問題というのが少しづつ変わってきている。その変化に気が付いていく必要があると僕は思う。新しい状況、複雑なことを踏まえていくことだ。たえず緊張し、心得ていなければならないことをリストとしては知っている必要がある。発達障害、あるいは生活障害が非常に複雑にあるっていうことを忘れて、単純に考えようとしてしまう。だから、課題は本当にいろいろ沢山あって、それをたえず振り返りを怠たらないということですね。

山内　ありがとうございます。活動の意義を見出せず退会される方も多い。福岡さんの方から、実際、今も活動会員でおられますが、どこに私たちは活動の意義を見出し、喜んで奉仕できると思いますか。

福岡　自分の考え、思いだけで電話相談のボランティアは続けれるもんではない。自分の人生を賭けるような、その人の生き様そのものが、いつも問われているような気持ちで電話相談に出る必要がある。まさに電話相談というのは、相手の方との出会いの場。いろんな方と出会うわけだけど、その時に、一人一人の抱えている事柄に自分がどう心寄せて、その人の気持ちを感じ取り、正確に聴き取り、心に響かせていくか。「自分と心を通わせ、響きあってくれる人がそこにいた」という、そういう出会いを相手の方に感じてもらえればね、お互いの人生が僕はそこで生きたことになるんではないか。そういう素晴らしい出会いの場ですから、やはり初心に帰って、be friending（ビー フレンディング）、まさに、愛をもって友になる、これは大事なことと思っていますね。そういう意味では、今度の創立40周年記念テーマに「つながるこころ、つな

げる明日」の言葉を選んだことには重要な意味があると思う。電話を掛けてきた人と良き隣人としてつながって行く、そしてその人と一緒に歩んだ結果、その人もわたしも明日を生きていけるように、明日に希望を持てるように支え合いながら電話を終わることができたら本当にいいなぁと思う。

山内　確かに電話を受けて、「それは、本当に大変でしたね」って、言葉で大変でしたねって言っている自分があるんだけど、本当に自分で大変と思ったのかなって反省させられる。杉本さんいかがですか。

杉本　福岡さんが言われたように、やはり活動の意義は、「能動的に自分を磨くこと」だと思う。「顔にその人の心が現れる。声がその人の表情を出す」と言われるように、会長も言われたが、本当に聴いたかは、必ずその人に伝わっている。技術的にいい対応をしようという前に「自分を磨く」「生きざま」が大事。やはり真剣に生きている人ほど、カウンセラーとしてもうまくできると思う。

二つ目は、私が継続してきたのも、やはり人と人とのつながり、カウンセラーとカウンセラーとのつながり、横のつながり、この絆があったからだと思う。今、組織が大きくなり、横のつながり希薄だが、私たち先輩が、40周年を迎えるにあたって軌道修正しながら、絆の輪が広がるようにやっていけば、新しい期の方たちも継続するように思う。

山内　200人を超えるメンバーですから、名前と顔が一致しない方もいらっしゃる。

杉本　小さい輪が大きな輪になって行けばいいと思います。

山内　ありがとうございます。1期の村田さん。

村田　多様な相談者、多様なカウンセラー、相談内容も非常に多岐にわたって、そういう機微に答えるような、その中でも一本筋が通った応答があると思う。ロジャーズの三原則、三条件を思い出すが、こういう基本的なものを基礎とする。こころの電話カウンセラーと掛け手との出会い、まさにホットな瞬間を初心を忘れず、大事にしていく、全く新しい気持ちで受け取る。出会い、機縁ですよね。機微、機縁、機序、こういう機能を持った金沢こころの電話が有機的な団体であったら、これからの将来50周年につながると思う。

星野　「人と人との関わり、関係」という言葉は、最近非常によく使われるが、僕が大事に思っているのは、「つながり」という言葉と、「絆」という言葉と、それから何かのときに「大丈夫」という言葉。何か起きたときに「大丈夫？」と疑問の形をとる場合と、それから「大丈夫」と返事で、その中にはかなり複雑なものがあるんですよ。ですから、僕が非常に注意しているのは、日本語の意味の深さもあるんだけど、「関わり」「関係」とかいう難しい言い方よりも、「つながり」とか、「きずな」とか、「大丈夫」という言葉の使い、意味の取り方ですね。これをカウンセラーというのは、使い分

ける、知っておくことが大事だと思っている。全く個人的考えですけど。

山内　ありがとうございます。大事にします。

星野　大事にしてください。

杉本　なかなか「大丈夫」と言えない。星野先生だからこそ、自然に出る言葉です。でも、やっぱり、安心感ありますよね。「大丈夫」と言われたら。

福岡　よーく聴いてもらって、つながりがね、それこそ絆がね、生きたものとして動いていけば、最後、相手から「大丈夫かな、やってみようか」という気持ちになるかもしれない。

村田　信頼感というか、根底にはそういうものが必要となってくる。

山内　ますます世の中の人々から大事にされ、信頼されて、我々ひとりひとりが、いい相談員として、対応できるような、そういうこころの電話でありたいなぁと思います。

村田　私は、人間としてかかわったら、つながっていくんじゃないか。その前提として、ぶれない自己一致した自分があること。金沢こころの電話の中にも、自己一致したぶれないところがあれば大丈夫だと思う。

山内　創設の頃は、中高生、学生、その親からの相談が圧倒的多かった。最近はスクールカウンセラーの先生が各学校に配属され、そういう教育相談はほとんどない。むしろ、30代、40代、50代、しかも男性が増えている。40年間の大きな変化だ。そういう意味で、さっきのような発達障害のような研修会とか、そういう方に対応するには、リストラ、経済問題、夫婦関係も含めて、社会背景を学んでいかないといけない。

村田　みんな子どもに及んできている。そういう学校臨床、発達障害に限らず、不登校、いじめ含めて、いじめが現場ではすごいんですよ。人間関係の問題、そういった学校臨床と言ったものを取り上げて研修していく必要がある。

山内　ところがその相談がないんですよね。でも、そういう問題を抱えた親御さんが別の形で、こう夫婦関係であったり、経済問題であったり、ということで電話があるのかもしれないですね。もともとずっとだどっていくと、自分の子供の育て方、あり方、家族のあり方に問題があるのかもしれない。

杉本　ＤＶ（ドメスティック・バイオレンス）も一緒ですね。ＤＶの研修受けたとき、やはりその子供さんがＤＶ環境の中で育つことで起こる問題大きい。そういうことを知って、電話を取ることですよね。

山内　研修部に期待する。よい研修を計画していきましょう。

村田　研修部だけでなく、やっぱり今、社会のニーズとして求められている。こころの電話はそれに応えていく非常に重要な立場にあると思う。話ししながら改めて思いました。

山内　今日はお忙しいところ、お集まりいただきましてありがとうございました。

（終）